



特集 tachikawa farmers market 100th anniversary

地域への思いを荷台に乗せて

朝早くから西谷^{よしひさ}義久さん親子が畑で育てた野菜などを出品するため、軽トラの荷台に並べています。「今日もたくさんお客さんが来てくれたらいいね」とうれしそうに話す二人——。向かうのは近くで開かれている「立川軽トラ市」です。月1回の開催ですが、楽しみにしている人が増え、SNSなどでも話題になっています。7月に100回目を迎えたということで、今月の特集ではその人気の秘密と、長年続けてきた主催者の皆さんの思いに迫りました。





子どもたちもお手伝い



手作りの旗が完成したのを見て、喜ぶメンバー



100回記念に何かしたいとみんなで相談

立川の魅力がぎゅっと集結

毎月第2日曜日に立川地区の成川商店前で行われている立川軽トラ市。そこには安くておいしい新鮮野菜やクスッと笑える手作り雑貨、地元で獲れた鮎の塩焼きなど、誰かに話したくなるような楽しい商品がいっぱい。出店者の皆さんも温かい笑顔で出迎えてくれます。100回記念のこの日、小さなスペースにはお手伝いさんを含め、10店舗約20人の出店者が集まりました。メンバーは変わりましたが、1回目から変わらぬ思いで続いています――

毎月第2日曜日、国道56号線を走っていると何やらにぎやかな催しが見えてきます。立川地区にある成川商店前で開かれる「立川軽トラ市」（以下、軽トラ市）です。とは言っても会場は狭く、並んでいる軽トラは2台。代わりに机やテントが並んでいます。手作りで温かみのあるのぼり旗や値札、ポツポツ広告も――。商品は地元産の野菜や果物、鮎の塩焼き、タコ飯、漬物、自家焙煎のコーヒーなどの飲食物から、天然石のアクセサリ、ドライフラワー、多肉植物、ヘッドスパまで。商品の珍しさもありますが、出店者も来場者も楽しそうにしているのが印象的です。

発起人の成川幸三さんは「立川地区は56号線沿いにある地域。た

くさんの車が通るけれど、降りてまで見てもらえるような魅力の発信ができていない。地域の高齢化が進み、野菜を出荷できずに畑に残っているという声も聞いていた。何かできないかと考えていたときに軽トラ市に出合い、これなら荷台に載せたまま販売できるし、利便性のいい立川らしい取り組みになると思った」と話します。立川軽トラ市実行委員会代表の西谷義久さんも「商品の良さと人の温かさが売りなので、対面販売というのもよかった」と加えます。「地域にぎわいと生きがいを生みたい」。そんな発起人たちの呼びかけに多くの人が応え、軽トラ市は始まりました。

約8年前に始まった軽トラ市は、7月10日に第100回目を迎えました。8時を過ぎるころには10組の出店者が集まり、子どもから年配の人までが楽しそうに準備をしていました。開始時間より20分前に来る常連客も――。「今月も楽しみにしてたよ」「こんな珍しいコーヒーが飲めるの?」。会場では出店者とお客さん、お客さん同士も気さくにあいさつを交わして、アットホームな雰囲気が流れていました。

メンバーの一人は「笑顔や喜びの声が私たちのエネルギー。楽しいですよ」とにっこり。月に1度の軽トラ市ですが、そこには立川の魅力がぎゅっと詰まっています。そしてその積み重ねは、立川地区の明るい話題の一つになっているようです。

なぜか気になる立川軽トラ市。笑顔で迎えた100回記念





盛岡 たかひと 智穂さん(41)、孝仁さん(43) = 日之地 =

夫婦で世界各国の豆を焙煎したコーヒーと内子の花材で作ったドライフラワーを販売しています。2年前に参加し始めたのですが、その頃は出店者が少なくお客さんもまばらでした。安くていい物がそろっているのだから、もっとお客さんを増やすことができるはずと思い、何とかしたいという思いになりました。

発信力が大切と考え、軽トラ市のSNSを立ち上げました。夫婦で毎日、コツコツと商品や立川の日常などを投稿しています。日に日にInstagramのフォロワー数が増え、今では2,200人以上になりました。それに比例してお客さんも仲間の笑顔も増え、楽しい雰囲気でもぎわうようになってきました。

40年ぶりに立川で暮らし始めたとき、地元の皆さんから「お帰り」と声をかけてもらいました。慣れない田舎暮らしへの不安な気持ちが和らいだのを覚えています。軽トラ市では、そんな地域の温かさに触れ合えるのもいいところ。地域の人や立川らしさいっぱいのすてきな商品に会いに来てほしいです。



アトリエでドライフラワーの花材を選ぶあすかさん



宮崎 ちほ 智穂さん(45) = 富長 =

絵を描くことや物を作ることが大好きです。軽トラ市では多肉植物の寄せ植えや消しゴムはんこなど、特技を生かした商品を出品しています。仲間から依頼されて、のぼり旗やポップ、手書きの値札を作っています。頼られていることがうれしくて、できることで力になりたいと思うようになりました。

私は職場が立川にあるだけで、地域住民ではありません。だから最初は出店を断りましたが、成川さんの押しの強さに負けました(笑)。でも、参加してみると、ものづくりが好きな人との会話が楽しくて、癒されます。都合の悪い日はメンバーが代わりに商品を販売してくれて、頼まれたのぼり旗やポップも期限はなし——。そんなゆるい感じが、仕事との両立が大変な私にはちょうどいいみたいです。

今はこの日ばかりは自分の好きなことを楽しめると、いい息抜きになっています。ゆるさでお客さんに迷惑をかけることもあります。笑って許してもらえます。これからもちょうどいい加減で、好きなことで、立川地区の皆さんと関われたらうれしいです。



仕事の合間に100回記念のポップを制作

ゆるい感じがちょうどいい
好きなことで地域に関わりたい



宮下 かおる 香さん(88) = 川中2 =

軽トラ市には第1回目から出店していて、メンバーの中では最年長です。畑で採れた野菜や果物、手作りの漬物やちらしずしを販売しています。夏は毎朝7時に畑に行くのが日課。トマトやトウモロコシなどがすくすく育っています。畑が広くて一人ではできないから、家族みんなで汗びっしょりになって野菜の世話をしています。体はこたえるけど、お客さんの喜ぶ顔を見るとやめられません。「野菜がおいしい」「おばちゃんのおすしは特別」と言ってもらってくれるので、「うれしい、また頑張って作ろう」と、やる気が湧いてきます。野菜も惣菜も、喜ぶお客さんの顔を思い浮かべながら作っています。この年まで元気でいられるのは軽トラ市のおかげかもしれません。

家に帰って、空っぽになった荷台を見て、「やれやれ今月もようやった。たくさん喜んでもらえてよかったな」と、家族と話しています。来月もみんなに会えるのを楽しみにして、たくさん積んでいくので、待ちよってくださいね。



順調に育つインゲン豆を見て、にっこり

笑顔と喜びの声がうれしくて
ずっと、やめずにおるんよ

盛り上がる舞台の裏側 100回も続いた 軽トラ市のヒケツ

軽トラ市の出店者はどの人も、生き生きとした表情が印象的で、楽しさが伝わってきます。お客さんや地域との関わりの中で心境が変化したという人もいます。「軽トラ市が生きがい」「特技を生かして力になりたい」「メンバーと一緒に立川地区の良さを伝えたい」——出店者の皆さんに話を聞くと、軽トラの荷台には載せきれないほどの思いや楽しみが、たくさんあることが分かりました。



1_会場の成川商店前には多くの来場者でにぎわう
2_対面販売でのやり取りも魅力 3_新鮮な野菜を格安で購入 4_手作りのポップが楽しさを演出 5_子ども連れのお客さんも多い 6_商品の説明を受ける来場者 7、8、9、10_手作りの品が並ぶ 11_過去最多の来場者数となった100回記念 12_冷たいアイスクリームでひと休み



みんな大好き 立川軽トラ市

お客さんの中には松山や今治から軽トラ市のためにだけに内子に来る人もいます。ファンの人たちの言葉から、軽トラ市がたくさんの人に愛されていること、立川の魅力が地域外にも広がっていることが伝わってきます。

Interview 私たち、立川軽トラ市のファンです 軽トラ市に何度も足を運ぶ人たちに聞きました

子どもたちも軽トラ市が大好き

2年前、Instagramを見て、地元感あふれる投稿に「面白そう」と惹かれました。鮎の塩焼きやかわいい絵が描かれたクッキーなど、楽しい商品が並んで、息子たちも喜んでいました。町外の私たちの顔を覚えてくれて気さくに話しかけてくれるのがうれしいです。今では息子たちから声をかけるほどです。少し遠いけれど、また来ようという気持ちになります。



野島 亜耶さん
(右) 漱太くん
(左) 叶達くん
= 松前町 =

地域とつながれる大切な場所

立川駐在所に来てから、ほぼ毎回来ています。立川は人が温かく、落ち着きのあるいい地域。その良さが会場の雰囲気にも出ています。会場では地域の人々が商品を通じて鮎やイノシシ、季節の話などをしてくれて立川のことがよく分かります。自分にとって地域やお客さんにつながる大切な場所。元気に長く続けてほしいので、これからも応援したいです。



古川 健士郎さん
= 立川中央 =

にぎわいが自分のことのようにうれしい

毎月第2日曜日はカレンダーに印を付けるほど、心待ちにしています。特に宮下さんのちらしずしが大好き。昔懐かしい味で、栗やフキなど旬の食材も入って、とってもおいしいんですよ。彼女と話すのも楽しみで、優しい笑顔にホッとします。最近、若いお客さんも増えてきました。昔からずっと来ているので、にぎわいを見ることがうれしいです。



尾上 幸子さん
= 内子21 =

私も一緒に応援したくなる

出店者の皆さんとの和やかな会話や笑顔が心地良く、ついつい長居してしまいます。用事がない日は必ず来るくらい軽トラ市のファンです。自然と応援したくなって、会社や個人のInstagramで投稿したり、友人に紹介したりしています。顔なじみの人が増えるのも楽しみの一つ。毎月、「今日はどんな出会いがあるかな」とワクワクしています。



垣内 幸子さん
= 伊予市 =



軽トラ市の小さな奇跡——

にぎわいを生んだ軽トラ市ですが、その裏には苦勞もありました。試行錯誤しながらも続けたことで今のカタチになってきました。小さな取り組みですが、コツコツと回を重ねることで地域の力になろうとしています。大事な「みんなが楽しいと思える場づくり」だと話す、軽トラ市の発起人の成川幸三さんに思いを聞きました。



立川軽トラ市実行委員会
成川 幸三さん(52) = 川中2 =

100回目を迎えて

100回目の会場では、「おめでとう」とたくさんの人に声をかけてもらいました。そこで行ったアンケートを見返すと「地域の人と会えるのが毎回楽しみ」「続けてくれてありがとう」「200回に向けて頑張つて」など、温かいメッセージにあふれていて目頭が熱くなりま

す。仲間とも「諦めずに続けてよかった」と喜び合いました。お客さんたちが応援してくれて、面白がつくれるから、こちらもう少しづつ良くなって続けることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。

「楽しい場づくり」を一番に

実は出店者が4組にまで減った時期もあります。「しんどい

し、売れんしやめる」と、1人、2人と離れていったのです。頑張るすぎて、みんな疲れてしまったんです。その頃は餅つきやそうめど、いろいろなイベントをしてい

ました。準備や片付けが大変で、今のようにお客さんとの会話を

楽しむ余裕もなかったと思います。

いま思うと、「地域のために」という思いが強過ぎたのだと思います。この8年で、大事な「みんなが楽しいと思える場づくり」だと学びました。認知度を高めようと来場者にお礼のハガキを送ったり、町外にチラシを配ったりしたこともありましたが、一番効果があったのは、「続けてさえいれば何かある」と出店者の負担を減らしたことでした。イベントをやめたことで準備が減り、気軽に

できるように——。私たちの思いに賛同してくれる地域の人たちや若い人たちも増えました。盛岡さん夫妻がSNSで発信するようになってからは、来場者数は3倍に増加。協力者も増えてにぎわいが生まれ、楽しむ人々の姿も増えて

小さな場所で大きな夢を

会場の成川商店前のスペースは約300平方メートル。小さな会場で特別なこともしていません。でも、諦めずに小さなことを続けてきたことで、「地域ににぎわいと生きがい」という私たちの描いた夢が少しずつ実現しています。最初から一緒に頑張ってきた宮下さんが、「軽トラ市が生きがい」と言ってくれたのがうれしいし、私自身も毎月第2日曜日が楽しみで仕方ありません。このワクワクが地域の魅力になり、地域のためになるんだと今は思えます。まだまだ仲間と一緒に立川の魅力を発信している最中ですが、軽トラの小さな荷台の上に地域への思いと感謝の気持ちに乗せて、これからも楽しみながら一緒に進んでいきたいと思

ひ一度「立川軽トラ市」に足を運んでみてください。

次回は現地で会いましょう

立川軽トラ市の魅力は、出店者も来場者も一緒になって「楽しい場づくり」をしていること。そんな雰囲気

が人気で、何度も訪れる「ファン」も生まれました。中には準備を手伝ってくれる人や、SNSや口コミで紹介してくれる人もいます。立川地区出身の人が、軽トラ市の日に立川に戻って参加することも多い

です。

どの地域でも人口減少という課題を抱えている現在。住人だけで地域を維持することが難しくなっています。地域の出身者や交流者が協力する「関係人口」の多さが大切になるそうです。そういった意味で、軽トラ市は小さな奇跡を起こしました。「なぜか放っておけない」。来場者の言葉に、地域づくりのヒントが隠れているの

101回 立川軽トラ市

- 日時：8月14日(日) 午前9時～正午 (毎月第2日曜日に開催)
- 場所：立川地区 成川商店前

立川軽トラ市Instagram

QRコードはこちら



立川地区には他にも魅力がいっぱい

- 1_ 8月ごろから荷台に並ぶブドウは軽トラ市の人気商品の一つ
- 2_ 原木シイタケは肉厚で香りがいいのが特徴
- 3_ 地域の子もたちに受け継がれる獅子舞
- 4_ 立川神楽は毎年3月ごろから町内各地で行われる
- 5_ 鎌倉山の中腹から望む冬景色
- 6_ 杉皮ぶきの屋根付き橋「鳥居元橋」が内子町の玄関口で来訪者を迎える